



## 第35回

### 相模トラフの巨大地震

※2023年10月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

関東大震災を起こした相模トラフ沿いで、マグニチュード(M)

8級の地震が今後30年以内に起こる確率は0〜19%になるとの研究結果を、佐竹健治・東京大地震研究所教授(地震学)らがまとめた。

国の試算は0〜6%だが、三つの歴史地震を新たに採用すると不確実性が広がった。31日の日本地震学会で発表した。

政府の地震調査委員会は2014年、相模トラフ沿いの地震活動の長期評価として、M8級の地震の30年間の発生確率を0〜3%と試算した(その後0〜6%に見直し)。その際に採用した歴史地震は、関東大震災を起こした大正(1923年)▽元禄(1703年)

▽正応(1293年)の三つの関東地震だ。

佐竹教授らはこれに加え、明応(1498年)▽元慶(878年)の三つの

関東地震のいずれかが、相模トラフM8級の地震に該当した可能性を想定。計3〜6の地震の組み合わせで、30年以内の発生確率を試算した。

その結果、明応のみが該当した場合に最も規則的になり、ほぼ310年おきに発生するとされた。前回の発生は100年前(関東大震災)なので、発生確率は0%になった。

一方、全3地震が該当した場合、永享と明応の間隔が約60年と狭く

最も不規則になり、発生確率は19%と最も高くなった。

この3地震は、津波堆積物たいせきの調査などで関東地震であることが有力視されているものもあれば、古文書の記載のみにとどまるものもある。

佐竹教授は「国の評価は裏付けの取れている3地震のみを採用しているため、次の地震までの間隔は長い。一方、近年では他にも関東地震の候補が複数出てきている。いずれかが関東地震だった場合、発生間隔がこれまでの評価より短い可能性や、ばらつきが大きい可能性が分かったと話した。